

**「探究基礎 I」(HOP)
における実践
～多角的視点の涵養を
めざした取組～**

感情を通してしか獲得できない知識とは？

歴史家の役割とは？

言語を習得する能力は先天的なものか？

理性の強みと弱みとは？

TOK

美的感覚の起源とは？

数学は経験とは無関係か？

無知は罪なのか？

問いを通して知識について考える 100時間の学習

実験によらない科学とは？

「である」ならば「であるべし」は成り立つか？

TOKと「探究基礎 I」(HOP)

IB	探究基礎
TOK	探究基礎 I (HOP)
批判的思考力を養う 「知識」とは何か？を問う 論理的な主張を身につける 多角的な視点を養う	批判的思考力を養う 論理的とは何かを考える 資料の扱い方を学ぶ 主張を伝える能力を養う
問いかけを通した学び	講義や実習を通した学び
生徒を知識に対する反省と 問い直しに導く	探究の「型」を学ぶ

TOK研究実践の目標

1. 「問い」 に対する

KnowledgeQuestionを考察

⇒批判的・多面的な視点から課題設定を行う

2. 社会的・文化的文脈を仮想・設定し、 「問い」を「解決すべき課題」へと

導くシミュレーション

⇒背景により認識に差異があることに気づく

⇒他者と協働し課題解決へ向かう態度を涵養

研究体制

探究基礎 I (HOP)担当者会議

探究基礎 I
企画立案会議

探究基礎 I 運営担当

TOK研究担当

1年生担任団
探究基礎委員指導担当

探究基礎 I (HOP)
授業担当教員

平成25年度調査研究の経過

- ・ IB校訪問、文献調査
⇒ TOKの概念や授業事例を研究
- ・ 「探究基礎Ⅰ」(HOP)の授業観察、記録
⇒ どこでTOKの趣旨を取り入れるか検討
- ・ 探究基礎Ⅰ 企画立案会議
⇒ 授業の指導案を検討

平成26年度調査研究の経過

4月 「探究基礎Ⅰ」(HOP)開始

7月 「問い」を多面的に捉える授業の実践

9月 ポスター発表会で調査結果の交流

「探究基礎Ⅰ」(HOP)の流れ

- ▶ メタ認知・クリティカルシンキング
 - ・心の理論
- ▶ 探究活動を構成する諸要素
- ▶ 課題設定とは何か
- ▶ 論文作成のプロセス
- ▶ ポスター発表を通じた交流

TOK研究実践の成果

《単元》

課題設定とは何かを考える

《活動内容》

1つの「問い」に対して、グループワーク形式で、個別具体的な社会的・文化的文脈を仮想・設定

→「問い」を「解決すべき課題」へと導く

→それぞれの立場から資料・データを吟味

→ポスター発表にて調査結果を交流

TOK研究実践の目標

1. 「問い」 に対する

KnowledgeQuestionを考察

⇒批判的・多面的な視点から課題設定を行う

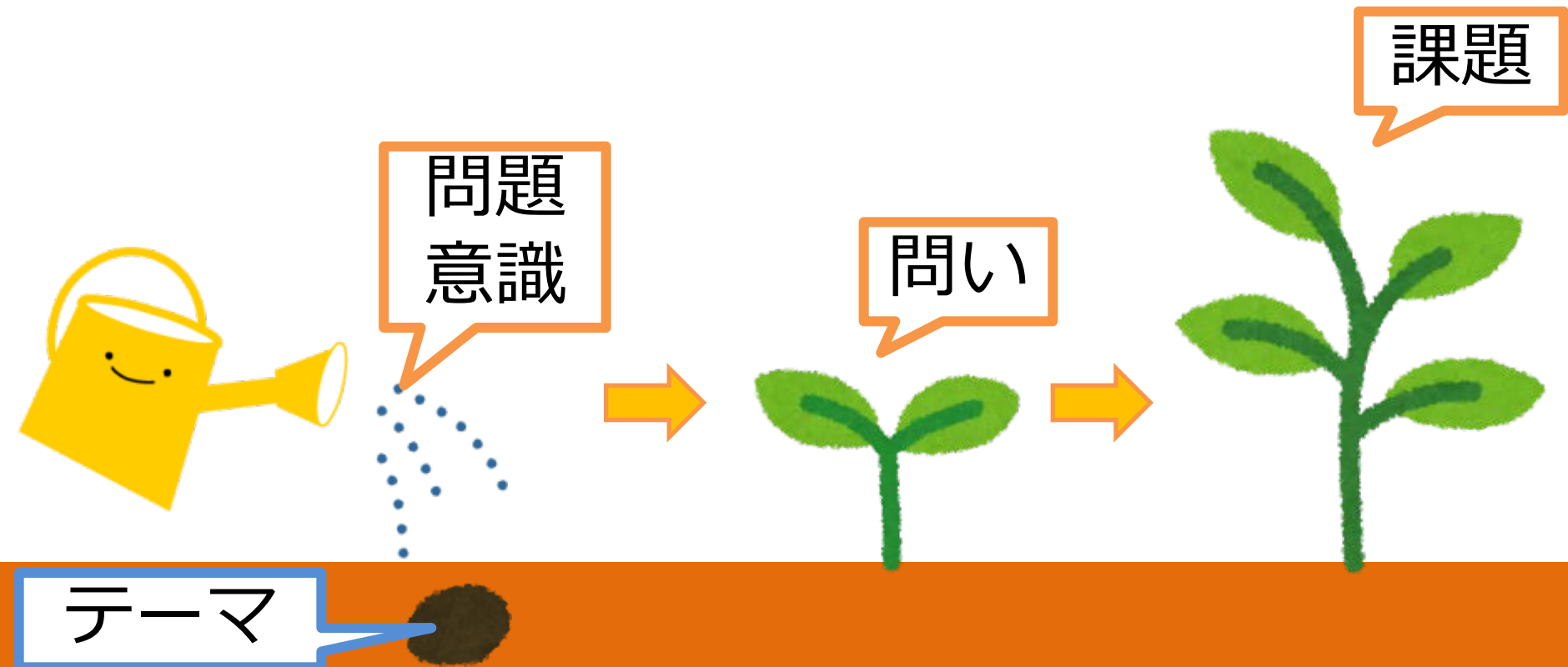
2. 社会的・文化的文脈を仮想・設定し、 「問い」を「解決すべき課題」へと

導くシミュレーション

⇒背景により認識に差異があることに気づく

⇒他者と協働し課題解決へ向かう態度を涵養

課題設定のプロセス



「問い」の問い直し

批判的・多面的視点

問いは普遍的に共有できる？

問い：太陽はどのように
に運行しているのか？

課題：??

問題
意識



テーマ：太陽



自然科学の枠組み

TOK研究実践の目標

1. 「問い」 に対する

KnowledgeQuestionを考察

⇒批判的・多面的な視点から課題設定を行う

2. 社会的・文化的文脈を仮想・設定し、 「問い」を「解決すべき課題」へと

導くシミュレーション

⇒背景により認識に差異があることに気づく

⇒他者と協働し課題解決へ向かう態度を涵養

立場を仮想し「問い」を 「解決すべき課題」へ

電力
会社

問い：原子力発電所は
再稼働すべきか？

国

周辺
住民

一般
の人

地方
自治
体

課題設定シート

問い《

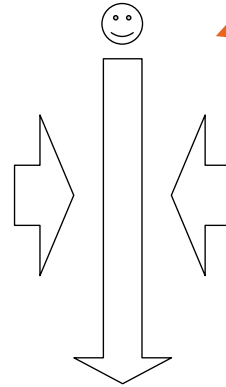
》

観点《

》

問いの曖昧な点を指摘せよ。

問いに関する常識を挙げよ。



課題《

》

仮説（ひとまずの答え）《

》

仮説（ひとまずの答え）を言うために必要そうな理由を挙げよ。

①

②

③

理由を補助する証拠となりそうなデータ・引用を挙げよ。

→ ①

左で挙げた証拠の入手元を明示せよ。

→ ①

→ ②

→ ③

...

立場の
設定

解決の
方針

課題設定

論点を
明確に

資料収集
と評価

「振り返りシート」より

- ・思い込みや先入観で、物事を判断しないようになれる。
- ・自分の意見を主張するとき、一度別の視点に立つことで、自分の意見の弱い部分がはっきりして、より説得力のある主張ができると思う。



批判的な視点の涵養

「振り返りシート」より

- ・偏った情報を集めてしまうことを防ぐことができると思います。
- ・情報をうのみにせず to 真実を考えることができると思う。



資料評価の重要さを認識

「振り返りシート」より

- ・寛容に他人の意見をうけとめ、それをクリティカルシンキングしながら取り入れることが大切だと思いました。
- ・クラスで活動する内容をきめるとき、その内容がだれに・どのように・・・なのかを人の気持ちにたって考える。



他者理解と協働の態度を育成

感情を通してしか獲得できない知識とは？

歴史家の役割とは？

言語を習得する能力は先天的なものか？

理性の強みと弱みとは？

TOK

美的感覚の起源とは？

数学は経験とは無関係か？

無知は罪なのか？

問いを通して知識について考える 100時間の学習

実験によらない科学とは？

「である」ならば「であるべし」は成り立つか？

今後の展開

- ▶ 各教科での「本質的な問い」
 - 生徒の知識を引きだし、繋ぎ合わせることを促す問いかけ
- ▶ 「模擬国連」のような議論の事前学習
 - 「落としどころ」を探す議論に向けて
- ▶ 課題
 - 抽象的な議論についての教員研修の充実

**「探究基礎Ⅱ」(JUMP)
における実践
～ループリックを用いた
研究論文の評価～**

EEとは？

- ▶ 履修科目に関連した研究分野について個人研究に取り組み、研究成果を4,000語（日本語の場合は8,000字）の論文にまとめる。
- ▶ 評価はIBOの定めたルーブリックを用いて試験官による外部審査
- ▶ EEの評価はTOKの評価と組み合わせて、DPのスコアとなるため非常に厳正な審査を受ける。

Extended Essayと探究基礎Ⅱ (JUMP)

	IB	堀川高校
科目	EE	探究基礎Ⅱ (JUMP)
研究分野	履修科目に関連した研究分野	1年後期に選択するゼミの研究分野
成果発表の手段	個人研究の成果を論文にまとめる	個人研究の成果を論文にまとめる +ポスター発表会
評価方法	IBOの定めたルーブリック	総合的な学習の時間の評価
評価者	IBOの任命した試験官による審査	ゼミ指導に当たる教員による評価

「探究基礎Ⅱ」(JUMP)

- ▶ 探究の「道」を知る期間
- ▶ 目標：探究活動を実践する
- ▶ 個人で研究テーマを決定
- ▶ 研究計画の立案
- ▶ 必要な知識・技法は自分で習得
- ▶ ゼミを超えた発表会
- ▶ 論文作成

探究基礎Ⅱ (JUMP)の成績評価の仕方

総合的な学習の時間の評価

興味・関心
を持つ力

課題を
設定
する力

他者に
表現
する力

課題を
解決
する力

評価の材料

通常のゼミ活動
研究計画書
ゼミ内中間発表
ポスター発表
論文

従来の論文評価の仕方

文章表現

「論文チェック
リスト」による
評価と添削指導



論文の内容

ゼミ独自の
評価の指標

全ゼミ共通の論文に対する
評価規準は無かった

そ じ ぢ

EE研究実践の目標

1. 論文の評価にルーブリックを導入し、観点と到達度をあらかじめ生徒に提示

⇒自身の学びや探究活動を評価

⇒次の段階を自発的に目指す力を育成

2. 各学問領域を横断,統括する評価規準/基準を設定

⇒普遍的な論文作成能力の評価が可能

⇒探究の指針を明確化

研究体制

探究基礎Ⅱ (JUMP)担当者会議

探究基礎Ⅱ
企画立案会議

探究基礎Ⅱ 運営担当

2年生担任団
探究基礎委員指導担当

探究基礎Ⅱ (JUMP)
ゼミ担当教員



EE研究担当

平成25年度調査研究の経過

○ IB校訪問、文献調査

- ・ 課題エッセイの評価方法について調査研究

○ 探究基礎担当者、IB調査研究担当者にて立案会議

- ・ 導入するルーブリックの観点、文言の検討

平成26年度調査研究の経過

- 4月 生徒に論文ルーズブリックの提示
- 8月 TAによるルーズブリックを用いた
1次評価
- 9月 ゼミ担当者によるルーズブリック
を用いた2次評価

EE研究実践の目標

1. 論文の評価にルーブリックを導入し、観点と到達度をあらかじめ生徒に提示

⇒自身の学びや探究活動を評価

⇒次の段階を自発的に目指す力を育成

2. 各学問領域を横断,統括する評価規準/基準を設定

⇒普遍的な論文作成能力の評価が可能

⇒探究の指針を明確化

()ゼミ ()組 ()番 氏名()				
※この評価と添削を参考にして、永久保存版論文の修正に取り組みましょう。				
JUMP論文ループリック		到達度		
		3	2	1
観 点	探究課題	導入部分に、解決可能かつ一般に価値があり、研究意義が明確な探究課題が示されている。	導入部分に探究課題が明示されているものの研究意義が示されていない。あるいは、解決できそうにない。	導入部分に探究課題が示されているが、問題意識が個人的すぎる、あるいは調査可能な範囲に既に存在している。
	調査・研究方法	探究課題の解決に適した、創意的あるいは、緻密な調査・研究方法が論文中に示されている。	探究課題の解決に適した、調査・研究方法が論文中に示されている。	探究課題の解決に適した、調査・研究方法が論文中に示されていない。
	学問領域に関する知識・理解	用語の使用が正確であるなど、学問領域に関する優れた知識と理解が、論文中に示されている。	学問領域に関する知識と理解が、論文中にある程度示されている。	用語の使用が不正確であるなど、学問領域に関する知識や理解が論文中に示されていない。
	考察・分析	収集した資料などの根拠を基に、探究課題に適した、説得力のある考えが論理的かつ明晰に示されている。	収集した資料などの根拠を基に、探究課題に適した議論をしようとしているが、表面的なものにとどまる。	収集した資料などの根拠から、議論を発展させようとしていない。
	結論	探究課題に呼応しており、かつ課題として扱っている範囲に対して過不足のない結論が示されている。	探究課題に呼応しているものの、言い過ぎていたり、扱い切れない結論が示されている。	探究課題とは無関係な結論が示されている。
※備考				

自分の到達
段階を確認



次の目標へ
方針立て

到達目標
の明示



各観点ごとの到達段階

EE研究実践の目標

1. 論文の評価にループリックを導入し、観点と到達度をあらかじめ生徒に提示

⇒自身の学びや探究活動を評価

⇒次の段階を自発的に目指す力を育成

2. 各学問領域を横断,統括する評価規準/基準を設定

⇒普遍的な論文作成能力の評価が可能

⇒探究の指針を明確化

探究基礎(JUMP)では普遍的な探究能力を身につけることを目標

EEの
評価規準



大学での
評価規準

全ゼミ共通
論文ルーブリック

様々なゼミの教員

普遍的な論文作成能力の評価へ

教員対象アンケートより

良い評価

- 生徒は評価を結構見ていた様子が見られる。
- 生徒個々に沿った指導ができるのでよい取り組みだと思った。

良くない評価

- 3段階評価はやりやすいが、生徒の差を表現しきれない。
- この項目だけでは、具体的に何を直せばよいのかわからない生徒が多く見られた。

高い成果を求めないわけではないが
EEのように厳しい外部審査を必要とは
しない。

探究活動の実践が目的。

今回の論文ループリック導入は、目標
とそこに至る段階を示すことで
実践を支援することが目的。

だからといって評価に齟齬が生じてよ
いかということとまた違う。

もし、成績評価に ルーブリックを導入するなら？

- ▶ 「総合的な学習の時間」の評価の4観点とのリンクを整備
- ▶ より多くの担当者による文言の検討。
- ▶ キャリブレーション（評価の評価）も必要か？
 - 論文をサンプリングして、全担当者で評価してみる
 - 評価のラインの擦り合わせ

CASの趣旨を踏まえた 体験活動の評価 ～研究開発と試行実施～

国際バカロレアのめざす学習者像

(文部科学省ホームページより)

- Inquirers
- Knowledgeable
- Thinkers
- Communicators
- Principled
- Open-minded
- Caring
- Risk-takers
- Balanced
- Reflective
- 探究する人
- 知識のある人
- 考える人
- コミュニケーションができる人
- 信念のある人
- 心を開く人
- 思いやりのある人
- 挑戦する人
- バランスのとれた人
- 振り返りができる人

▶ 堀川高校の「自立する18歳」に通じる点

→ CASの手法を体験活動に取り入れる可能性を探る

CASの趣旨をふまえた体験活動の評価

▶ Creativity, Action, Service

(創造性・活動・奉仕)

- TOK, EEとともにDP資格の必修学習（コア）の1つ
- 学問以外の生活、地域に根差した奉仕活動による体験や共同作業による協調性を重視する
- 2年間にわたり、芸術・音楽・演劇などの創造的活動、スポーツ活動、奉仕活動をそれぞれ最低50時間ずつ、合計150時間以上がDPの必修。
- **評価**も行われる。

(参考：相良憲昭・岩崎久美子編

『国際バカロレアー世界が認める卓越した教育プログラム』2007)

堀川高校 体験活動における課題

- ▶ 反省会で...口頭発表による感想の交流や反省
 - 感謝やねぎらいが多い
 - 言語化による具体的な反省・自己評価が弱い
- ▶ **体験活動の意義・指導の観点が不明瞭**
 - 個人の経験・暗黙の了解（教員・生徒）
- ▶ **体験活動が個々で完結している**
 - 3年間の視野で成長を捉えにくい

CAS研究実践の目標

1. すべての体験活動を 1つの評価方法で評価

⇒活動が相互に有機的に関連し、堀川高校の最高目標である「自立する18歳」に繋がっていることを可視化できる。

2. 活動により達成すべき目標と 到達度を、事前に生徒に明示

⇒ 生徒に活動の意義を常に明確に提示することができる。

CAS研究実践の目標

3. 活動の成果物を評価と共に ポートフォリオに蓄積

⇒ 生徒の成長を長期的な視野でとらえることができる。

4. 3年間の体験活動を通した 生徒の成長を可視化

⇒ その成長に対する自覚を促し、
かつ必要に応じて言語化することができる。

CAS調査研究・実践の経過

▶ 平成25年度

- IB校訪問、文献調査
 - ・ パフォーマンス評価の方法について調査研究
- 教員研修会
 - ・ 体験活動を通して育てたい力について交流・整理・共有
 - ・ ルーブリック、ポートフォリオを用いた評価法について研修
- 中学生対象学校説明会スタッフに対する評価法の試行

CAS調査研究・実践の経過

▶ 平成26年度

- 1年生を対象とし、試行実施

CAS研究実践 試行実施

▶ ルーブリック

- 最高目標「自立する18歳」に向けて、
多様な体験活動を通して育てたい力を体系化
- 活動により達成すべき目標と到達度を生徒に提示
⇒ 生徒に最高目標と、
そこに至る段階を常に明確に認識させる。
- 各種体験活動の機会における評価の実施

体験活動における自己評価指標・自己評価シート（2014.10版）

堀川高校学習者達成目標

校訓 立志 勉勵 自主 友愛

最高目標 自立する18歳

堀川高校憲章（Since 2008.10.20）「ひとつになる 高みをめざす ひとりになる」

◎ 私たちは、多様な存在や価値を大切に、時間と力を重ねて、ひとつになることをめざします。

◎ 私たちは、よりよいものを創出することを求め、困難に立ち向かい、工夫を重ねて、一層の高みに向かうことをめざします。

◎ 私たちは、誇り高く生きることを願い、自己を見つめ、力を蓄えて、自覚したひとりになることをめざします。

体験活動 自己評価ルーブリック

■体験活動名 ■あなたの役割..... ■活動期間 2014年.....月.....日（ ）～.....月.....日（ ）

■活動内容

記入日

指標●★月.....日（ ）

評価◆月.....日（ ）

提出締切月.....日（ ）

	大項目	大項目の説明	キャップストーン（到達点）	マイルストーン（中間指標）	ベンチマーク（基本点）	
			3	2	1	0
評価の観点	A 自律力	役割の認識・遂行 臨機応変な対応 他のメンバーへの気配り	自分に与えられた役割を遂行するとともに、 他のメンバーの活動も助けつつ 、活動の目標達成に向けて積極的に行動することができる。	活動の目標達成に向けて、与えられた役割を果たすだけでなく、必要に応じて 臨機応変に対応 することができる。	活動の目標達成に向けて、 与えられた役割を理解 し、行動することができる。	与えられた役割を理解し、行動しようという意欲がない。
		自己評価				
	B 計画遂行力	G:目標を見定め P:計画を立て D:実行し C:評価し A:改善を図る力	活動の目標を実現するための計画を自ら立て、場合によっては自己評価し 改善を図りつつ、期日までにやり遂げる ことができる。	活動の目標を達成するために必要な事項を自ら整理し、 自ら計画を立て、実行に移す ことができる。	与えられた課題を 計画的に遂行 し、与えられた 期日までにやり遂げる ことができる。	与えられた課題を期日までにやることのできない。
		自己評価				
	C コミュニケーション能力	向き合う姿勢 共感的態度 自分の意見の表明 建設的な話し合い	相手の意見を尊重しつつ、自分の意見も積極的に伝え、かつ 合意に向けて建設的な話し合い をすることができる。	相手の立場に立って 共に考える姿勢 を保ちつつ、 自分の意見も伝える ことができる。	話を聞く時に、相手に目線を合わせるなど、 相手と向き合う姿勢 を作ることができる。	相手と話をする姿勢をとることができない。（黙る。目を上げない。興味のない態度、不満な態度をとる。など）
		自己評価				
	D チームワーク醸成力*1 (フォロアーのみ)	肯定的な態度 リーダーの補助 メンバー支援	リーダーを補助する役割として、共に活動するメンバーに対して、 絶えず励ましや支援を行う ことで、チーム内に一体感を生み出すことができる。	活動への自主性だけでなく、チームをけん引する リーダーの役割を認識し 、その活動を積極的に支持し助けることで、チームの均衡を図ることができる。	協働で行う活動や、 チームのメンバーに対して、常に肯定的な態度を示し 、自主的に活動に参加することができる。	活動に対して否定的な態度を示す。 チームの一部のメンバー（またはすべてのメンバー）に対して 敵対的な態度 を示す。
		自己評価				
	D' チーム指揮推進力*1 (リーダーのみ)	安心感を与える 信頼感を与える 尊敬される言動	活動に積極的になれないメンバーに対しても積極的に声をかけ参加を促すことにより、チームの全員が一丸となって 、活動の目標に向けて取り組む雰囲気を作り出すことができる。 メンバーに 尊敬されるような言動 をとることができる。	メンバーの仕事の遂行状況を絶えず把握し、助言を行うことにより、メンバーの意欲を喚起 することができる。 メンバーに 信頼感を与える ことができる。	活動全体の役割を把握し、メンバーに 平等に仕事を振り分ける ことができる。 メンバーに活動の目標、および各自の役割を理解させることができる。 メンバーに 安心感を与える ことができる。	活動の目標を理解することができない。 活動に向けて事前に準備をすることができない。
		自己評価				
		記入例	★（活動前の目標はこ） ←..... ◆（活動後の自分はここまで印） ←..... ●（活動前の自分の位置）			

*1 D「チームワーク醸成力（フォロアーのみ）」とD'「チーム指揮推進力（リーダーのみ）」は、役割によってどちらかを選択する。

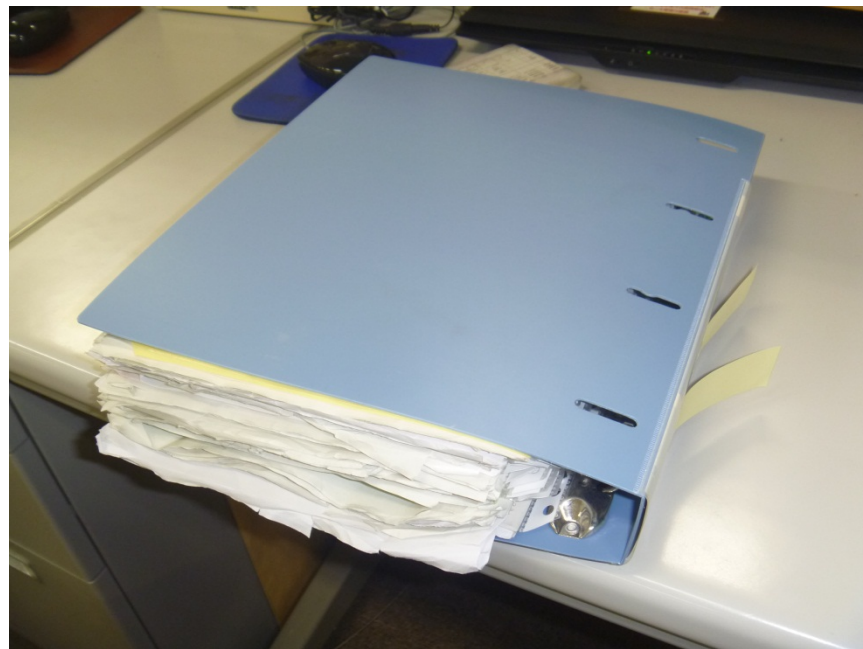
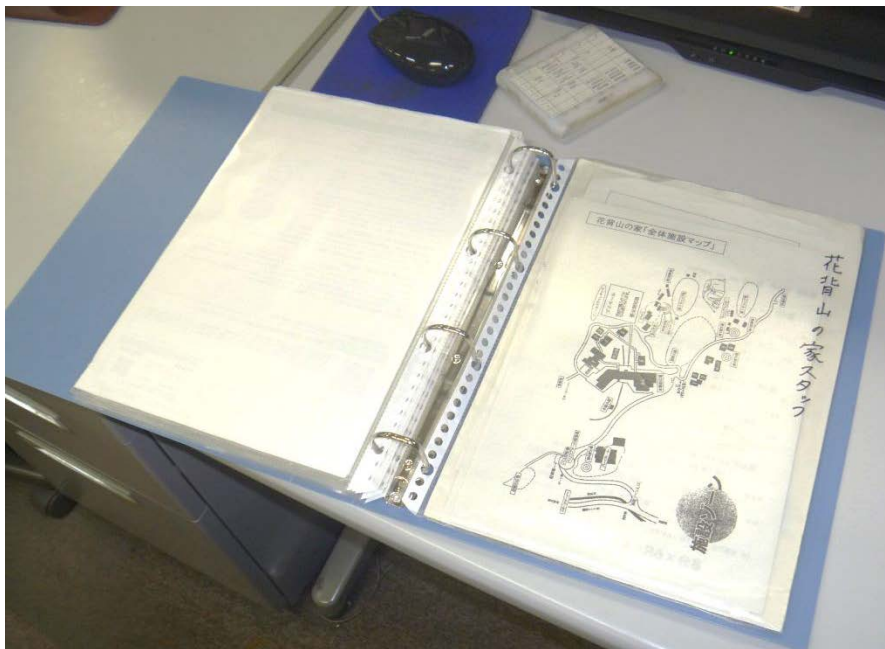
CAS研究実践 試行実施

▶ ポートフォリオ

- 様々な体験活動の成果物を蓄積
⇒ 生徒の成長を長期的な視野で
とらえることができる。
- 3年間の体験活動を通じた生徒の成長を可視化
⇒ その成長に対する自覚を促し、
言語化することができる。

CAS研究実践 試行実施

▶ ポートフォリオ例



CAS 試行実施の流れ

① ルーブリックの提示

- 体験活動前に「体験活動ルーブリック」を用いて目標設定



▶ 体験活動に参加



② 評価

- 体験活動後、目標からみた達成度を「自己評価用紙」に記入
- 一緒に活動したメンバー 2 人に「他者評価用紙」の記入依頼



CAS 試行実施の流れ



③ ポートフォリオ作成

- 「自己評価用紙」「他者評価用紙」とともに、活動で得た成果物をH Rに置いているファイルにとじる（作成したプリントなどなんでもかまわない）
- 一定の期間ごとにファイルの整理を行い（半年 1 回など）、「自分の成長にとって意味があった活動の記録」を残し、あとの資料は放棄・または自宅に持ち帰る



- ▶ 3 年間蓄積した資料の整理を通じて、体験活動を通した成長を振り返る機会を設ける。

CAS調査研究・実践の経過

▶ 平成26年度 1年生対象

- 03月 「ポートフォリオ」と「ルーズブリック」による評価の概要説明<合格者登校日>
- 04月 ポートフォリオ用ファイルを配布 (1年全員)
- 07月 振り返りシートによる評価 (学校説明会スタッフ)
- 11月 体験活動ルーズブリックを用いた自己評価と他者評価 (学校説明会スタッフ)
- 12月 第1回ポートフォリオの整理
ルーズブリックによる自己評価 (1年全員)
- 03月 第2回ポートフォリオの整理
ルーズブリックによる自己評価 (1年全員)

CAS調査研究・実践

▶ 学校説明会（7月）

- 説明会後の振り返りを予告・目標意識の喚起
- 生徒振り返りより→ ルーブリックに近い観点を生徒も意識

▶ 学校説明会（11月）

- 自己評価表を兼ねたルーブリックを活動前に全員配布
- 到達目標設定を呼びかけ、説明会後の振り返り予告
- 説明会後、反省会にて他者評価用紙を配布。記入→回収
- 生徒振り返り（評価用紙の自由記述欄）より
→ ルーブリックの項目を一定意識（特に他者評価）

CAS調査研究 成果と課題

▶ ルーブリック試行実施

- ルーブリックの項目と説明は生徒の振り返りに効果
- 他者評価において項目の内容への意識がより強くみられる
→ 生徒間の交流が効果を促進
- ルーブリックの文言は適切か検討
- 他の活動でも生徒が自律的に活用できるか

CAS調査研究・実践の経過

▶ 平成26年度 1年生対象

- 03月 「ポートフォリオ」と「ループリック」による評価の概要説明<合格者登校日>
- 04月 ポートフォリオ用ファイルを配布 (1年全員)
- 07月 振り返りシートによる評価 (学校説明会スタッフ)
- 11月 体験活動ループリックを用いた自己評価と他者評価 (学校説明会スタッフ)
- 12月 第1回ポートフォリオの整理,
ループリックによる自己評価 (1年全員)
ポートフォリオ作成アンケート
- 03月 第2回ポートフォリオの整理
ループリックによる自己評価 (1年全員)

CAS調査研究 成果と課題

- ▶ ポートフォリオ 生徒アンケートより抜粋①
ポートフォリオを作成した現在の感想を書いてください。
 - 自分が頑張ってきたものが、ポケットの数、ファイルの分厚さという目に見えるもので測れて励みになった。
 - 過去と今の自分を比べてどうだったのかと思い出しやすいになりました。
 - 今までの自分の活動を改めて見返すことができ、常に目標を考えるようになりました。
 - 整理整頓が唯一できているファイル。見るだけでうれしい

CAS調査研究 成果と課題

▶ 成果

- 体験活動を通じた成長の可視化
- 成長への生徒の自覚・成長の言語化、長期的視野獲得へ
- 目標設定・到達目標への意識
(ループリックとの相乗効果)

CAS調査研究 成果と課題

- ▶ ポートフォリオ 生徒アンケートより抜粋②
「ポートフォリオを作成した現在の感想を書いてください」
 - まだ自分の中で「ただのプリント整理ファイル」にしかなくていいない。意味を見つける。他人のを見せってもらう。
 - まだ何を入れればよいかわからない。
 - 自分なりのファイルがすでにある。

CAS調査研究 成果と課題

▶ 課題

- 生徒への説明・普及
- 生徒同士の交流の機会を検討
(活用法など)
- 自主的にファイルを作成している生徒の
自己評価・他者評価

CAS調査研究 成果と課題

【試行実施をうけて】

- 教科外での活動の意義と目標の共有・明示に道筋
- 教員・生徒ともに説明・普及の機会が大切
- ルーブリックを生徒自身がじっくり読む仕掛け
(目標設定を検討する機会をつくる)
- ポートフォリオは作成・整理を繰り返しよびかけ
- 定期的に整理する機会をつくる
(長期的な振り返り)

CAS調査研究 今後

- ▶ 体験活動の評価について教育効果を検証
 - ルーブリックの文言，運用方法は適切か？
 - ポートフォリオの運用方法は適切か？

IB 調査研究成果報告会での質疑応答の記録

■探究基礎 I (HOP)について

Q. 探究基礎の指導に当たる教員は教科とは関係なく担当するのか？

A. HOP では国語，数学，英語，情報の教員が 1 クラスに 2 人ずつあたる。それぞれの担当教科に応じて，内容を分担し，オムニバス形式で担当する部分もある。例えば，文献検索の仕方は国語科が受け持つ。

STEP 以降では，例えば，言語・文学ゼミは国語科の教員が担当するといった形で，教科ごとに担当するゼミがある。よって教科に関わらず，教員は何らかの形で探究基礎にはかかわることになる。

Q. 探究基礎の授業が他教科の授業にどのような影響を与えているか？アクティブラーナーの育成に探究基礎がどのように関わっているか？

A. 教科の中では，例えばグループワークが活発にできることや，探究的な問いを投げかけたときに，生徒の戸惑いは少ないといった，探究基礎を経た生徒の変容が教科の授業に影響しているという場面は見られる。しかし，探究基礎を通して，生徒の教科学習への意欲を以下に向上させるかは，本校においても今後の課題と考えている。

Q. TOK の趣旨を踏まえた HOP の授業では TOK のテキストは何を使ったか？

A. 授業研究の参考として TOK のテキストを用いたが，実際の授業では使用していない。

Q. TOK の趣旨を踏まえた授業はどの程度行ったか？

A. HOP の 2 時間分の授業に，「問い」を多面的に捉える授業を取り入れた。

Q. TOK の評価はどのようにしていたか？

A. TOK の部分だけの評価は特につけていない。HOP 全体の評価として，前期中間の筆記試験と，前期末のポスター発表と論文を対象とした評価を行っている。

Q. 「問い」そのものの「問い直し」という視点は教員間でどのように共有したのか？

A. 担当者会議にて，指導に当たる教員間で共有した。しかし，題材として何を扱うかはそれぞれの教員にゆだねている。

Q. 場合によっては「問い」の「問い直し」を掘り進めると，学校教育が前提とする近代科学の枠組みを超えるような価値観に触れることになると思うが，どのように扱うか？

A. 実際は，そこまで深い考察には至っていない。しかし，もしそういった深い考察が展開されたとすれば，理論的な枠組みを俯瞰する問いかけとして評価に値するのではないかと考えられる。

Q. TOK の Knowledge Question にある仕掛け（way of knowing や keyword）は堀川高校ではどのように掲げているか？

A. そういった TOK 上の仕掛けは今回の HOP では扱っていない。

■探究基礎Ⅱ (JUMP)について

Q. TA をどのように探しているか？

A. 教員の知り合いを通じたり、本校の卒業生を通じて探している。また、TA から次の TA へと、大学のゼミの中で代々紹介していただいているような場合もある。

Q. TA に対する生徒指導上の教育はどのようにしているか？

A. 業務説明会として、2 点のお願いをしている。1 点目は「生徒に答えを教えなくてください」ということである。指導は質問の形ですること、や文献の紹介によって指導してもらうようにしている。2 点目は「教育に携わることになる」ということを念押しし、個人的なメールのやり取りは必要ならば、必ず教員に確認することや、個人情報の扱いには注意を徹底することを依頼している。

Q. 1 年半の探究基礎を終えて、2 年後期から 3 年にかけて、探究的な授業は展開しているか？

A. 2 年後期から理系は化学、文系は「文科基礎教養」という科目が開設される。「文科基礎教養」という科目では、2 冊のテキストを取り上げ、輪読のようなかたちで読解し、テーマを決めて発表するという、生徒主体の授業を展開している。

Q. 課題研究でグループ研究ではなく、個人研究にする良いところは？

A. グループにするデメリット、牽引する生徒とついていくだけの生徒が発生することを回避。しかし、海外研修での探究活動はグループでやっている。

Q. JUMP での論文ループリックを用いた自己評価は行わないのか？

A. 自己評価の段階は具体的に設定してはいないが、「探究ノート」という毎回の振り返り用のノートにあらかじめループリックを掲載している。

Q. 論文やレポートにおける、剽窃や盗用にいかに対応しているか？

A. 担当教員の発見にゆだねられる部分はある。明らかに文章が変なものや、他の生徒と似ているものが発見されれば追及する。

また、論文提出段階で「誓約書」を書かせており、成果公開にあたって、剽窃やねつ造がないことを誓わせている。

加えて、「学ぶ機会を放棄することに相当する」「著作権の侵害に値する」「他の研究者や社会に迷惑をかけることになる」という 3 点を軸に指導し、啓発している。

■体験活動について

Q. 生徒は必ず何らかの体験活動に参加するのか？また、兼任も可能なのか？

A. 必ずではなく、生徒の自主的な活動として位置付けている。また、複数の委員会などに参加する生徒もいる。しかし、先輩から兼任は難しいという話も聞いているはず。

Q. IB の CAS では一人一人が自分で課題を見つけてくることになっているが、堀川高校では学校側がスタッフ活動などを提示する。それは現実問題として、一人ひとりの課題に対応するのが難しいからなのか？それとも、別の理由があるのか？

A. スタッフ活動など、もともとあった体験活動のなかに、CAS の評価方法を導入するというのが今回の研究課題であった。

■研究開発について

Q. 今回の IB 調査研究指定を受けて、IB 認定校を目指すわけではないという話があったが、なぜか？

A. もともと、本校の教育活動の質を向上させ、学習指導要領の中で IB の手法を導入することで一条校での取り組みのモデルケースとして、普及するのがねらいであった。

Q. IB の調査研究の成果が、教科の授業での生徒の言語活動に影響を及ぼしたか？

A. 及ぼしたかという点、確かめるのも難しく、すぐに効果が見えてくとは思えない。しかし、各教科における生徒の振り返りによる自己評価力については、確かめてみる価値があるのではないかと考えられる。

Q. 学校全体として研究開発に当たる教員と、そうでない教員の温度差をいかに無くすか？

A. 探究基礎があるので、教員全体が研究開発になんらかの形で関わることになる。研究開発担当はいるが、実践は教員全体で行うという構造になっているので、温度差は生じにくいのではないかと考えられる。